信州発
国際協力
JICA駒ヶ根
2010 春号
No.29
2010年3月31日発行

特集
日系社会ボランティア

TOPICS

日系社会ボランティア特集　P1～3
2009エッセイコンテスト結果　P4
訓練所の1日　P4
英語を学ぼう(出前講座)　P5
元気にやっとるけ　P5
長野県出身ボランティア奮闘レポートリレー　P6
出発コメント　P7
メールマガジン開始　P7
お知らせ　P8

海外の中の日本に触れる

～日系社会ボランティア～

在ブラジル長野県人会が設立され、昨年11月で50周年を迎えました。サンパウロで開かれた記念式典には村井仁県知事も出席。日系社会と長野県とのつながりを見つめ直す契機にもなりました。今回の特集は「日系社会ボランティア」。日系社会で活動するJICAボランティアや、県内在住の日系人の問題に目を向ける元青年海外協力隊員らにスポットを当てます。まずはじめに、日系社会の歴史を振り返ってみましょう。

ブラジル日系社会100年史略

日系社会シニアボランティア(ブラジル日本移民百年史編さん委員)　幸脇(さいのわき)　一英(かずひで)さん　(御代田町)

日本の新聞・テレビがたびたび報道したブラジル日本移民百年祭から１年余が経過しました。百年祭は首都ブラジリアで2008年1月17日、「日伯交流年」開幕セレモニーで始まりました。ルーラ大統領をはじめとする閣僚や、日系団体代表120名が全国から参加するほどの盛大さで、日本文化と日系人に関心と信頼を寄せる多くの市民が日系人と一体となり楽しむお祭りとなりました。これはヨーロッパ諸国からの移民祭と比べても特異な百年祭との声でした。

日本移民の歩みは1908年(明治41年)6月18日、781名が乗った笠戸丸のサントス港到着に始まります(それ以前の私的な移民も存在しますが)。移民環境は1892年の日本人移民の許可に始まり、日伯修好通商条約調印、日本公使館開設などにより徐々に整えられてきました。

厳しい日本経済の打開策として始まった移民は、1885年(明治18年)からのハワイ官民移民、メキシコやペルーなどへの移民を経て、ブラジル移民で「移民三期」とも言われる時代を迎えました。労働条件の悪さを理由にイタリアがブラジルへの移民を禁止した時期に重なり、コーヒー農園の労働者確保に困ったブラジルにとっても日本移民は好都合だったようです。

誠実勤勉を旨に、日本文化の一つでもある農協組織や日本人同士の相互信頼をよりどころに艱難(かんなん)辛苦に耐え、ブラジル社会の恩恵(高等教育まで無料など)をもいかした結果、移民一世約26万人に由来する現日系人150万人は、1億9千万人のブラジル社会の中産階級へと成長し、社会から信頼と尊敬を勝ち得ました。この事実は日系人とブラジル人との更なる信頼関係構築に貢献するだけでなく、日本人への好意的理解の助長、将来起こるであろう移民との融和、そして平和実現に不可欠な共存共栄への英知となるでしょう。

食べられる時代が来るとなぜか、相互支援や助け合いが弱まり、集団や社会のエネルギーが欠如します。昨今の日系社会では日本人の特性や文化を喪失したかのような現象も散見され、長期にわたり混迷する現日本社会に近づいているかのようでもあります。

今こそ、我が身を振り返り、ブラジル移民史に多くを学びたいと思います！

▲ブラジル長野県人会50周年記念式典出席のため来伯された長野県知事ご一行と北沢長野県人会長ほか幹部と(2009年11月、日本記念館庭の日伯修好百周年記念碑前にて)

日系社会ボランティアとは？

海外には北・中南米の国々を中心に260万人以上の日系人が生活しています。日系人とは、すでに海外に移住しそこに根を下ろした移住者とその子孫の総称です。彼らは、日本とは異なる風土や社会の中で営々と新生活の確立に励み、自らの生活水準を著しく引き上げたばかりでなく、周辺地域の発展と活性化という大きな波及効果をもたらしています。日本のイメージを形成する役割をも果たしているといっても過言ではありません。

日系社会ボランティアは、そんな人々とともに、生活・協働しながら、中南米カリブ地域社会の発展、日本語や日本文化の継承に協力しています。毎年秋に募集があり、教育文化、保健衛生、福祉部門など約10の協力分野がありますが、派遣されるボランティアの大半は日本語教育に関連する職種です。

ブラジルの日本語学校では、習字や太鼓など日本文化の授業も盛んに行われています。特に太鼓は人気があり全国大会も開催されるなど、たくさんの子どもたちが練習に励んでいます。

習字の授業の一コマ。
日本文化の継承も日系社会ボランティアの重要なテーマです

あせらない・あわてない・あきらめない ～日系社会青年ボランティアに参加して～

日系社会青年ボランティア23回生　勝又（かつまた）　洋美（ひろみ）さん
（パラグアイ／ソーシャルワーカー／飯田市）

2年ぶりの雪景色を見て「あ～。日本に帰ってきたんだ」と実感しました。

私が日系社会青年ボランティアとして派遣されていたパラグアイ共和国は南米のちょうど中心。日本の反対側に位置し、東部ブラジル国境近くにあるイグアス移住地は180世帯、700名ほどの日系人が住んでいます。

約70年前に日本人の移住が始まったパラグアイでは、一世の方々が高齢期を迎え、福祉の必要が出てきています。そんな中、福祉に対する地域の意識向上やシステム作り、ボランティアグループの立ち上げ等が主な活動内容でした。

着任当初は地域住民の状況把握の日々で、一歩進んで二歩下がるという表現がピッタリ（？）な状況でした。補償や保険制度のない国で、高齢者福祉は急速に進む少子高齢化や出稼ぎなど、地域を取り巻く様々な課題とも深く結びついていました。関係者と話し合いを重ねながら、地域で必要な形を模索する必要がありました。

その中で、デイサービスを始めました。当初は、現地パートナーの女性１名と、参加者５名と小規模でしたが、徐々に参加者も増加。現在は主婦や学生によるボランティアグループが週1回、高齢者の方々を集め自主的に活動しています。限られた材料でのゲームの企画、お弁当を持って地域の人々との交流、日本食を提供する食事会などなど、介護予防だけでなく、日本文化に触れる機会が少なくなっている地域の中で日本文化に触れる良い機会となりました。

また、観光資源や娯楽も限られた土地で、パラグアイダンスや和太鼓グループ、地域行事などにも参加させて頂き、人々とのふれあいの中で、充実した日々を送らせて頂きました。何もないところから作ることの大変さ、楽しさを味わうことができたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。日々笑い、泣き、考え、人と関わることの原点に帰ることのできた2年間だったと感じています。

南米にある、もう１つの故郷、ぜひ長野県の皆さんにも知って頂けたら嬉しいです。

▲50年ぶりの筆。デイサービスで書道（左から2人目が勝又さん）

▼JICAパラグアイ30周年記念式典で、現地の2世、3世の方々と和太鼓の演奏

つながりを感じて　～日伯交流100周年の年に～

中野市立豊田中学校　教諭　野口（のぐち） 久美子（くみこ）さん
（平成20年度JICA教師海外研修参加）

どのくらいの人が自分の家族の過去を知っているでしょうか？　自分の先祖が以前どこに住んでいて、どんなことをして生活をしていたのか、私たちはそんな過去とのつながりを日々感じながら生きているでしょうか？

日本人ブラジル移住100周年の節目の平成20年、JICA教師海外研修を通じてブラジルに行く機会を得ました。ニュースの「日伯交流100周年」という言葉や歴史の教科書から、多くの日本人がブラジルに行ったことは頭では分かっていました。しかし、人々の思いや本当のつながりは分かっていませんでした。

水のあるところを求めて森の奥深くまで進み、命がけで水田を広げた平野植民地。そこではまだ日本人のコミュニティーが残り、日本の風習、伝統が脈々と受け継がれていました。教育が大切、そして日本語を残そうと立てた大志万学院。親子3世代、ブラジルの社会に溶け込みながらも日本を思い、日本人のルーツを持つ自分を大切にし、出会ったばかりの私たちをもてなしてくれた南雲さん家族。

日本人のブラジル移民の歴史は過去のものだけでなく、現在のブラジル日系社会に深く影響していました。

「日本が食糧難になったらブラジルからこの農産物を送るから、っていう気持ちでいるのよ」とある人が言いました。現在のブラジル日系社会では2世3世で、失われていく日本語、出稼ぎ問題、さまざまな問題・課題を抱えているのは事実です。しかし研修を通して、多くの日系の人々が、自分の家族がブラジルに移住し苦労して作り上げた生活を誇りに思い、ブラジルの中の日本を大切に思っている気持ちが伝わってきました。

過去の歴史とのつながりを感じる、日本人の功績を誇りに感じる－。今回のブラジル日系社会を間近に見ることで、自分が忘れていた「人々の努力、苦労が作り上げた現在」を改めて感じる研修でした。

▲大志万学園3年生の授業で折り紙を教える野口さん（右）

▲南雲さんの自宅にて。温かく迎えてくださり夕食を振舞ってくださいました

日本人ではなく日系人であるということ

上田市市民生活課　小林（こばやし） 義博（よしひろ）さん
（元青年海外協力隊員／エルサルバドル／音楽）

協力隊終了後、私は地元の上田市役所に就職しました。窓口業務を担う部署に配属となり、地方公務員として働きながら、「自分にこそできることは何だろう」と考えるようになりました。

上田市に住む外国籍住民は県内一で、大半は日系ブラジル人。「そうだ、ポルトガル語だ！」と思い立ち、協力隊で身につけたスペイン語と同じルーツのポルトガル語の勉強を始めました。もちろん独学、実践は窓口でガチンコです。外国語大学の先生が聞いたら笑われてしまいそうなポルトガル語ですが、それを駆使して応対した窓口エピソードを一つ、紹介したいと思います。

ある日系人男性から出生届を受けたときのことです。書類には産まれたお子さんの名前が、アルファベットとともに漢字で書かれていました。「漢字には意味がある。娘にはこんな子に育ってほしいんだ」と彼は上機嫌に語ります。

現在、外国人が日本で戸籍届出を行う場合、中国のような漢字公用語圏以外の国の者は、カタカナで届出しなければならない、と定められています。その旨を伝えると、彼の大きな瞳から幾粒もの涙があふれ出ました。

この出来事は日系人の持つジレンマ、そして日本人が無意識に抱える非寛容な国民性を象徴しているように感じられました。私自身、隊員として赴任した国の女性と結婚し、現在「日系の」娘の3人で暮らしていますが、家族で外出すると「旦那さんどちらの方？中国？韓国？あっ！ブラジルか！」などと、面白い質問に出会うときがあります。妻と笑いながら、「日本人ってどういう意味だろうね？」と話すこともしばしばです。

世界同時不況の影響か、失業や生活困窮などの相談で私の職場を訪れる日系人が増えています。派遣切りされ、失業保険もない。国に帰ったところで仕事も家もない。自分の生まれた国でも「外人」呼ばわり、先祖の故郷と思っていた日本でもやはり「ガイジン」だった。日系人たちは、日本人、そして日本社会が探すべき明日を教えてくれている気がします。

▲ポルトガル語を駆使し、窓口で日系人（手前）の相談に乗る小林さん

2009年度JICAエッセイコンテスト

長野高校・草間さん 文部科学大臣奨励賞受賞

「行動～地球と私のためにできること～」をテーマに作品を募った2009年度JICA国際協力エッセイコンテスト。その高校生の部で、全国から応募のあった24,451点の中から、長野県長野高校1年生、草間由紀子さんの作品が、トップ3に入る最優秀賞文部科学大臣奨励賞に輝きました。快挙を達成した草間さんの素顔に迫ります。

小学生のころから環境省のエコクラブの活動に参加、6年生でUNEP（国連環境計画）の愛知会議に参加したのを皮切りに、環境に関わる国際会議を多く経験してきました。いまやグローバルに活躍する若手のホープ、その素顔は勉強と弓道の練習に励む高校生です。

草間さんの行動力の基礎となったのは、飯綱山（長野市）のフクロウの調査でした。捕食されたネズミの種類の分析、ヒナの追跡調査、巣箱作り…。このような作業を小学生時代から続けることで、「地元の山の生態系の変化を長期的に見ていきたい、危機が来てから気付くのでは手遅れになってしまう」と語る草間さん。暑い夏でも、冬の雪山でも、仲間と地道な調査を続けています。

国際会議を経て、草間さんは新しい視点を得ました。「世界には、日本で考えていたものとまた違った大きな問題が山積みであることに気付いた。日本でエコ活動というと節水のレベルだけれど、例えばインドでは衛生的な水の確保もままならない。視野を広くもって課題を捉えたい」。また海外で、自分の意見を主張し相手の意見を聞くという、議論する力が鍛えられたとのこと。環境活動にいろいろな人を巻き込み、一般の人に発信していくことが今後の活動姿勢となっていきそうです。

国際的な場での新しい人たちとの出会い・発見が、草間さんを次のステージへとつなげていきます。

▲自分たちのエコ活動を紹介したポスターを手にする草間さん

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2009　長野県受賞者、受賞校

個人賞 高校部門

最優秀賞文部科学大臣奨励賞

草間 由紀子（長野県長野高校1年）
「実践＋継続＝∞（無限大）」

国内機関長賞

牧野 美明（長野県下伊那農業高校3年）
鍵を握っているのは・・・。

佳作

北原 鈴子（長野県赤穂高校1年）
松木 智彩（長野県長野西高校1年）

個人賞 中学部門

国内機関長賞

関島 真美子（佐久長聖中学校2年）
一つの家族になるとき

佳作

菅沢 友里圭（大町市立仁科台中学校3年）
伊東 七星（塩尻市立広陵中学校2年）
丸山 結生（安曇野市立三郷中学校3年）
髙澤 清佳（伊那市立伊那中学校1年）
笠原 雄太（岡谷市立岡谷西部中学校1年）
清水 優果（御代田町立御代田中学校3年）

個人賞 青年海外協力協会賞

小宮山アンジェリーナ（信州大学教育学部附属長野中学校1年）
宮島　開（信州大学教育学部附属長野中学校3年）
矢澤 優衣奈（才教学園中学校1年）
弘世 航太（信州大学教育学部附属松本中学校3年）

学 校 賞

特別学校賞

長野県上伊那農業高校
長野県下伊那農業高校

学校賞

高　校…2校　中学校…15校

訓練所の一日

No.21 ～ターゲット・ランゲージ・ウイーク～

駒ヶ根訓練所では英語、スペイン語、フランス語、ロシア語、ネパール語、シンハラ語（スリランカ）、ベンガル語（バングラデシュ）、キルギス語など、ボランティアが途上国で使用する言語の学習に取り組んでいます。65日に及ぶ派遣前訓練では、公立中学校3年間の外国語授業の約3分の2に当たる210時間の語学授業が組み込まれています。訓練修了後はすぐ、外国語一色の生活が待っています。

そこで訓練終盤には日本語を使わず、極力学習中の言語で生活する「Target Language Week（ターゲット・ランゲージ・ウイーク）」があります。期間中は「ブエノスディアス」「ボンジュール」「ナマステ」「アッサラームアライクム」など、様々な言語のあいさつが飛び交います。授業中はもちろん、休み時間や食事中も学習中の言語だけでコミュニケーションを行っています。伝えられないもどかしさや、伝わったときの感動を味わい、これから出発する派遣国での生活を想像しながら、訓練生は日々の語学学習に取り組んでいます。

▲期間中は訓練所スタッフ（左）もボランティアに対し外国語で対応します

JICAボランティア経験者や職員らを講師として派遣し、途上国の話や活動体験談などを行う国際協力出前講座に新たなメニューが加わりました。「異文化と外国語を同時に学んじゃおう」というものです。この授業誕生のきっかけとなった駒ヶ根市立赤穂小学校の教師の方に感想を寄せていただきました。興味のある方、お気軽にJICA駒ヶ根までお問い合わせください！

英語の授業を通してJICAの皆さんから学んだこと

赤穂小学校 6年生担任　内城（うちしろ） 正登（まさと）さん

本校では今年度、外国語教育をスタートしたものの、まだまだ研究不足であり、外部講師を招こうにも、どなたにお願いすればよいか大変悩んでいました。そんなとき、国際交流の面でつながりのあった青年海外協力隊の方に講師として来ていただけることとなり、児童はもちろん、教師も大いに学ぶことのできる機会をいただきました。

2回の授業では、基本的なあいさつや自己紹介、色について教えていただきました。英語の授業に緊張している子ども達。なかなか声が出せません。しかし講師が用意した教材（英語を話す国々のカードや色の単語カードなど）を見ると興味がわいたのでしょう、写真を熱心に見たり、友達と悩みながらスペルを並び替えたりしていました。

同じ国のカードを持つ人をあいさつしながら探すゲームを通じ、「Hi. My name is ~. Nice to meet you.」を自然に話せるようになったし、新しく知った色の単語がスラスラ出るようにもなりました。子どもの日記にも、「色の言葉の並べ替えが難しかった。他の言葉も知りたい」「あいさつはちょっと恥ずかしかった。また教えてほしい」などの感想がたくさん書かれていました。

授業では欧米諸国だけでなく、アジアやアフリカでも多くの国が英語を使うことを知ることができました。これによって英語を学ぶことで世界中の人とつながることができると実感したようです。また識字率が低い国々では文字を読めないことは不便であるだけでなく、命の危険を招くこともある（例えば地雷地帯の警告など）という話を聞き、言葉や文字を学ぶ大切さとありがたさが子どもの心にも届いたようです。

写真左：外国の衣装を身にまとった訓練所スタッフによる英語の授業
右：オリジナル教材を使い、「色」を表す単語のスペルを勉強中

元気にやっとるけ？

「エーデルこまがね」では認知症高齢者の方々が2つのアルプスに抱かれた豊かな自然環境の中、ゆったりと生活しています。訓練で訪れるJICAボランティアは職員の補助や利用者との会話を楽しみながら1日を過ごします。

所外活動先より隊員へのメッセージ

エーデルこまがね（駒ヶ根市）

所外活動の受け入れを始めて3年が経ちました。利用者の方々は協力隊員を孫のように思っていて、毎回訪れるのを楽しみにしています。最初は何をしていいか分からず、戸惑っているボランティアも、時間をかけるうちに笑顔で利用者と会話をしたり、折り紙をしたりし始めます。職員ではない外部の方と関ることで、利用者の方にもいい刺激になっているようです。

▲いつもボランティアを明るく受け入れて下さるエーデルこまがねの職員の皆さん

活動2日目はボランティアがゲームや踊りを披露してくれます。中でも出身地の民謡を歌って下さったことが印象的でした。活動が終わるころには手を握り「また来てね」と2年後の再会を楽しみにする利用者も多くいます。職員が 普段、手の届かないところの環境も整備して頂き非常に感謝しております。

実はここの職員の娘さんも協力隊に参加中です。途上国で活躍している皆さんには、体には十分気をつけて精一杯頑張って欲しいと思います。

シリーズ 長野県出身

ボランティア 奮闘レポートリレー

report_52

青年海外協力隊員

ウズベキスタン
青少年活動（飯田市） 永田麻美子（ながたまみこ）さん

ウズベキスタン共和国

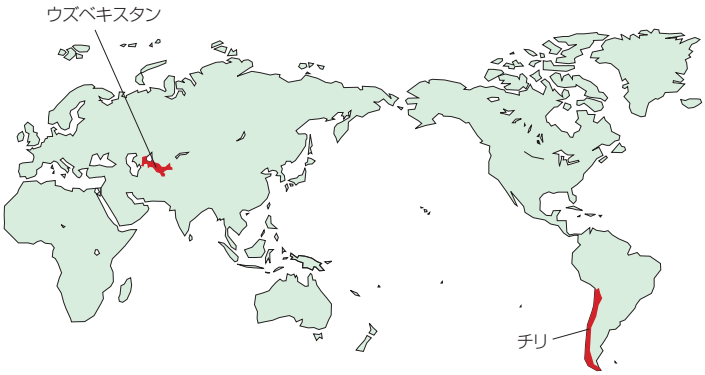
面積：44.74万 km²（日本の約1.2倍）
人口：2,750万人（2009年：国連人口基金）
首都：タシケント
住民：ウズベク人 80％
ロシア人 5.5％
タジク人 5.0％
カザフ人 3.0％
（2009年 CIA The World Factbook）
言語：公用語はウズベク語
（テュルク諸語に属する。但し、タシケント、サマルカンド、ブハラ等主として都市の諸方言はペルシア語の影響を強く受けている）。
またロシア語も広く使用されている。
宗教：主としてイスラム教スンニ派
（外務省HP：各国・地域情勢より）

ウズベキスタンの首都タシケントに赴任して早1年。首都といえども道はデコボコな上、マンホールのふたがないことがあり、ここでは「上を向いて歩こう」というのはちょっと危険です。またゴミの分別が全くないのは、便利な反面、ゴミ出しのたびに良心が傷みます。

私の配属先、ウズベキスタン日本人材開発センターでは、ビジネス人材の育成と両国の理解促進を目的に、様々な活動を展開し、年間7万人近い来館者があります。私が携わっている相互理解促進事業では、茶道や折り紙など日本文化の紹介や体験教室のほか、ウズベキスタンの伝統楽器を在留邦人の方が習う機会も提供しています。学校や幼稚園を訪問しての出張折り紙教室も行っており、出来上がった作品を得意そうに見せる子どもたちの笑顔に癒されています。多種多様な参加者のニーズに応えるため日々奮闘しているうち、自分自身の引き出しが増やせたように思います。

こちらに来て、日本人のもったいない精神を伝えられたらと、端切れを利用した布わらじ作りも教え始めました。日本のアニメブームを背景に「マンガの描き方」講座を始めたところ、子どもを持つ主婦層までが参加してくれました。今年5月には、盆踊り祭りを開催する予定です。スタッフや支援者の方々とともに、日本の夕べをウズベキスタンの皆さんの心に届けたいと思っています。

▲子どもたちに折り紙を教える永田さん



report_53

シニア海外ボランティア

チリ
経営管理（安曇野市） 工藤 元彦（くどうもとひこ）さん

チリ共和国

面積：75.6万km²（日本の約2倍）
人口：1,659万人（2007年：世銀）
首都：サンティアゴ
住民：スペイン系75％
その他の欧州系20％
先住民系5％
言語：スペイン語
宗教：カトリック（全人口の88％）

私は南米チリの首都サンチャゴに2009年3月下旬に赴任しました。チリの国土は南北約4000km、東西の幅平均175kmでウナギの寝床のような国ですが、面積は75万平方kmで日本の2倍あります。細長い領土の西側は太平洋東側は5000～6000m級のアンデス山脈、北部は1000kmに及ぶ砂漠、そして南部は南極に囲まれておりいわゆる陸の孤島と言えます。国土の80%が山岳部であり火山も多く約50の活火山があり長野県とよく似ています。

私は国際協力庁に派遣されチリの機械・金属工業の工場を毎日訪問して、生産性向上の指導をしています。私が訪問・指導する企業の管理者・作業者は私のアドバイスを素直に聞いてくれるので大変うれしく思います。まだいろいろな点で日本より管理レベルは低いですが少しずつ向上していることがわかります

チリ人は一般に陽気で、たいへん親切な国民です。例えば電車の中で妊婦や赤ちゃんを抱いている人や老人が乗ってくると数人の人が席を立ってどうぞと手招きします。私の残り任期中多くの企業を訪問して、さらに指導改善していきたいと思います。

▲招待されたパーティの席で、てんぷらの作り方を指導しているところ（帽子かぶっているのが工藤さん）

行ってらっしゃい!!

長野県出身

新ボランティアのみなさん

長野県出身のボランティア計13名が3月下旬から順次、それぞれの任国へ出発しました。
（かっこ内は派遣国名／職種／出身市町村）

【シニア海外ボランティア】

今井（いまい）　寛（ひろし）さん
（コスタリカ／マーケティング／千曲市）
大手食品製造会社で果実、野菜等の生原料の仕入れ調達（品種改良、栽培技術指導を含む）を38年間やってきました。定年を節目に長年の経験で得た知識、技術を開発途上国の農業発展のために役立てたいと考え、志願しました。

江崎（えさき）　玲子（れいこ）さん
（インドネシア／日本語教育／富士見町）
インドネシア・バリ島に、日本語教師として赴任します。昨今、介護士を目指してインドネシアから来日される方も多く、言語による意思疎通の問題もあるようです。多くの方々のお役に立てる2年間でありたいと考えています。

冨田（とみた）　健太郎（けんたろう）さん
（パラグアイ／土壌分析／長野市）
現職ですが、前回はパナマ、今回はパラグアイに赴任します。今まで、協力隊時代からパナマ、コロンビア、ブラジル等において海外経験を積んできました。これらの経験は将棋の駒として使えますが、任国では初心を忘れず、取り組む所存です。

【青年海外協力隊】

石坂（いしざか）　あゆみ さん
（セネガル／PCインストラクター／長野市）
パリダカールラリーで知られているセネガル。HIV陽性者へのケアを行っている病院で、情報管理などソフト面から医療をサポートしてきます。まだまだ力不足は感じますが、現地の人達と一緒に成長し、ともに実りある2年間にしたいです。

尾崎（おざき）　真理子（まりこ）さん
（フィリピン／村落開発普及員／伊那市）
フィリピンのレイテ島州都、タクロバンへ行きます。マングローブの海に育つ蟹の生産のために働く予定です。レイテは日本とも歴史的に関係が深く、民俗誌の宝庫なので楽しみです。

小林（こばやし）　貴之（たかゆき）さん
（モザンビーク／村落開発普及員／上田市）
アフリカ大陸にあるモザンビークに村落開発普及員として派遣され、農民の所得向上などに携わる予定です。国際協力という幅広い活動の中で、自分に何ができるかまだ分かりませんが、少しでも現地の人の役に立てればいいと思います。

坂本（さかもと）　夏希（なつき）さん
（セネガル／看護師／御代田町）
首都ダカールから東に約500キロ。タンバクンダ州にある病院で整理・整頓・清掃・清潔・しつけの5Sといわれる活動を行う予定です。応援してくれる人たちへの感謝を忘れず、浅間山の麓での看護師経験をいかし、現地の人と共に元気に2年間精一杯頑張ってきます。

龍野（たつの）　瑞季（みずき）さん
（キルギス／観光業／上田市）
中央アジア・キルギスの西部タラスで観光振興を目指し活動する予定です。人々との出会いを大切にし、現地の人の心に残る活動がしたいです。支えてくれる周りの人たちへの感謝の気持ちを胸に、健康第一で頑張ります。

富井（とみい）　久美子（くみこ）さん
（タイ／作業療法士／飯山市）
障がい児ホームで作業療法士として活動します。現地スタッフと共に考え、行動し、時には背中で語りかけ、障がい児の生活をよりよくするお手伝いができればと思います。笑顔を忘れずに、日常生活も楽しみタイです。

中村（なかむら）　彩子（あやこ）さん
（ブルキナファソ／行政サービス／原村）
第三の都市・トドゥク市の市役所で文書管理の仕事を担当します。文化も価値観も違う国では、自分の無力さを実感するかもしれませんが、できることから着実にこなそうと思います。何よりも、ブルキナ人のありがとうと笑顔のために。真摯に元気にがんばってきます!

原（はら）　昇（のぼる）さん
（セネガル／野菜栽培／川上村）
私は野菜栽培を教えにセネガルのカオラックに行きます。任国の発展に少しでもつながるよう、しっかりと役割を果たしてきたいと思います。

山田（やまだ）　紗織（さおり）さん
（セネガル／村落開発普及員／長野市）
元協力隊員である兄の背中を見たことがきっかけで協力隊を志して早10年。念願かなって、西アフリカのセネガルに派遣されます。今日ここにいられることの幸せと感謝の気持ちを忘れずに、寂しくなったら信濃の国を聞きながら、現地の方と話し合い、悩みながら、「共に生きる」ことができたらと思っています。

渡辺（わたなべ）　信也（しんや）さん
（パナマ／野菜栽培／中野市）
「パナマ運河」で有名なパナマで野菜栽培隊員として、貧困の格差が顕著な農村で唯一の現金収入源であるコーヒーの栽培支援、有機農業、稲作、販売ルートの確保などに携わる予定です。不安もありますが、やりたいことは沢山あります。念願の一歩を応援してくれる家族やみな様方への感謝を忘れず、半人前ですが一丁前の希望を持って、2年間精一杯頑張ってきます!

JICA駒ヶ根 メールマガジン 登場!!

JICA駒ヶ根は新年度より、メールマガジンをスタートさせます。JICA駒ヶ根からのお知らせはもちろん、県内の国際協力に関する動きやイベントなど、耳よりな情報をリアルタイムでお届けします。配信を希望される方はJICA駒ヶ根メールマガジン担当（jicakjv@jica.go.jp）まで、メールでご連絡ください。

なお、広報紙「信州発　国際協力」は今号をもって終了とさせていただきます。長い間ご愛読、ありがとうございました。

お知らせ （お問い合わせは駒ヶ根訓練所担当まで）

青年海外協力隊&シニア海外ボランティア 平成22年度　春募集開始!

募集期間:4月1日(木)～5月17日(月)

県内各地で募集説明会を行います。

【青年海外協力隊】

開催地	開催日	時　間	説明会場
長野	3月27日(土)	10:30～12:30	長野市もんぜんぷら座　802会議室
飯田	4月 3日(土)	10:30～12:30	飯田市りんご庁舎　会議室1
松本	4月10日(土)	10:30～12:30	松本市中央公民館（Mウィング）4-4会議室
上田	4月14日(水)	19:00～21:00	上田市中央公民館　2階　会議室
長野	4月17日(土)	10:30～12:30	長野市もんぜんぷら座　801会議室
伊那	4月21日(水)	19:00～21:00	伊那市役所　会議室501

【シニア海外ボランティア】

開催地	開催日	時　間	説明会場
松本	4月10日(土)	10:30～12:30	松本市中央公民館（Mウィング）4-3会議室
上田	4月14日(水)	19:00～21:00	上田市中央公民館　2階　会議室
長野	4月17日(土)	10:30～12:30	長野市もんぜんぷら座　802会議室
伊那	4月21日(水)	19:00～21:00	伊那市役所　会議室502

駒ヶ根訓練所1日体験入隊 参加者大募集!

途上国で活動するJICAボランティアの派遣前訓練を一日だけ体験してみませんか？語学授業や異文化理解ワークショップなど、盛りだくさんのメニューで皆さんのご参加をお待ちしております。(定員30名、要予約、昼食代600円)

日　時：平成22年4月24日(土)　11:00 ～ 16:15
場　所：駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

がんばれ!! 長野県出身JICAボランティア！

JICAボランティア派遣実績　　平成22年1月31日現在

①青年海外協力隊員数
派遣中　45名（内女性32名）
帰　国　606名（内女性268名）
累　計　651名（内女性300名）

②シニア海外ボランティア数
派遣中　12名（内女性4名）
帰　国　32名（内女性6名）
累　計　44名（内女性10名）

③日系社会青年ボランティア数
派遣中　0名（内女性0名）
帰　国　17名（内女性9名）
累　計　17名（内女性9名）

④日系社会シニアボランティア数
派遣中　1名（内女性0名）
帰　国　2名（内女性0名）
累　計　3名（内女性0名）

編集後記

年が明けてからハイチ、チリと大地震が相次ぎ、甚大な被害が出ました。JICA関係者を含む日本人の無事は確認されましたが、多くの方の日常生活が一瞬にして奪われてしまいました。国際協力に携わる者、そして地震国に住む者として、無関心ではいられない状況が続いています。

新年度からJICA駒ヶ根のメールマガジンが始まります。県内の国際協力の輪をどんどん大きく広げたいと思っています。ご期待ください。(塩)

APRIL　4月

7日(水)　平成22年度第1次隊派遣前訓練開始

12日(月) 15:10－17:00
公開講座「国際関係と日本の国際協力」(講師:廣野良吉氏／成蹊大学名誉教授)

13日(火) 13:00－14:50
公開講座「JICAボランティア事業の理念と目標」
(講師:伊藤隆文氏／JICA青年海外協力隊事務局長)

14日(水) 13:00－13:50
公開講座「JICA事業概要」(講師：小貫和俊氏／JICA青年海外協力隊事務局課長)

15日(木) 15:10－17:00
公開講座「技術と開発のかたち」(講師：中村尚司氏／龍谷大学教授)

MAY　5月

1日(土) 15:10－17:00
公開講座「異文化の理解と適応」(講師：木村秀雄氏／東京大学大学院教授)

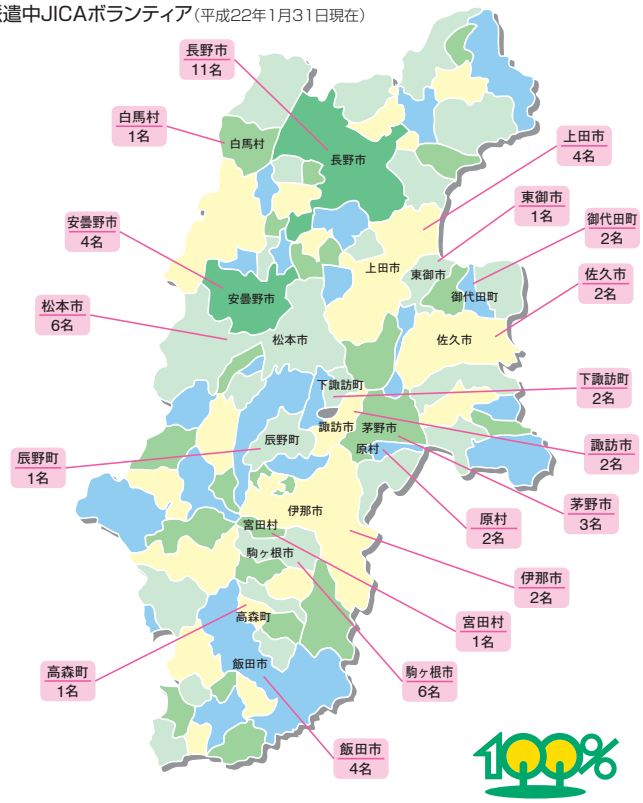
11日(火) 19:00－21:00
コンサート「地球のステージ」(場所：駒ヶ根訓練所／地球のステージ事務局)

28日(金) 15:10－17:00
公開講座「ニッポンの知恵から学ぶ～日本の開発経験～」
(講師：矢島亮一氏／NPO法人「自然塾寺子屋」理事長)

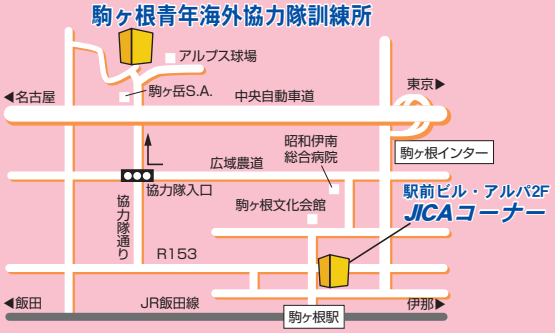
JUNE　6月

10日(木)　平成22年度第1次隊派遣前訓練修了

派遣中JICAボランティア(平成22年1月31日現在)



古紙100%再生紙

信州発 国際協力
No.29　平成22年3月31日発行
JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY KOMAGANE

信州発 国際協力
独立行政法人 国際協力機構
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂15
TEL.0265-82-6151(代)/FAX.0265-82-5336
E-mail/jicakjv@jica.go.jp
http://www.jica.go.jp/komagane/index.html